

令和2年度

— テーマ・水について考える —

水の週間記念作文集

第42回 「全日本中学生水の作文コンクール」三重県推薦分

目次

(掲載順は、学校名・氏名とも五十音順)

第42回全日本中学生水の作文コンクール	入選			
水道水がとどくまで	高田中学校	二年	作田 滯	1
第42回全日本中学生水の作文コンクール	佳作			
第17回琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール	流域賞			
「曾祖母が教えてくれた水の大切さ」	高田中学校	二年	米山 百音	3
第42回全日本中学生水の作文コンクール	佳作			
水の恵みを感じて	高田中学校	二年	舘 優衣奈	5
「水が教えてくれたこと」	高田中学校	二年	長井 咲椰子	7
宮川用水から学ぶ	皇學館中学校	三年	白石 伊甫貴	9
第42回「全日本中学生水の作文コンクール」について	11

入選

水道水がとどくまで

高田中学校 二年 作田 滯

朝八時、バシャバシャと音を立て、顔を洗う。ひんやりとした水が肌にしみて心地よい。今日も私は水と暮らしています。流れる水の音を聞きながらふと思いつく。水道から出る水が透き通っている。安心して飲める。当たり前のように思えてしまうこれらのことは、世界では決して当たり前ではない、ということ。

ジリジリとした暑さをスパイシーな香りが吹き抜ける、タイ・バンコク。父の転勤によりタイに移り住むことになった私はタイの、日本との水事情の違いに大きく驚きました。タイでは水道水が飲めません。そのため、飲用水として使う場合は浄水器を通す必要があります。食器は一度水道水で洗いますが、使う時は、もう一度浄化した水でゆすがなければなりません。浄水器に溜まった汚れを見た日、私は衝撃を隠せませんでした。泥のような濁り切った茶色、生臭さ、小さな

埃のような何か、塩素の臭い……。こんなものが水道水に含まれているのか、というショックとなぜ汚れてしまったのだろう、という疑問が頭の中を駆け巡りました。なぜタイの水道水は汚れてしまうのでしょうか。社会見学で訪れた、「バンケン浄水場」でその答えを知りました。浄水場で働く人の話によると、実はタイの浄水場で浄水されてすぐの水は飲むことができるそう。タイの水道水自体はWHOの水質基準を満たしており、水源、浄水場など検査がなされていると言います。しかし、蛇口までの配水管の衛生状態に問題があるため、水道から出る水の水質が悪化しているのだと聞きました。実は水道水が飲める国はたったの十五ヶ国であり、私たちのもとに安心・安全な水道水が届けられるまでには、長い道のりがあったのです。日本で水道水が飲めることは決して当たり前などではなく、そこ

に携わる多くの人々の努力の賜物なのです。それに気付かず、感謝を忘れていた自分の見ていた世界が、小さな小さなものに思えました。

「水道水が飲める。」までのハードルはそれだけではありません。世界で問題となっている「水不足」は、SDGs、持続可能な開発目標の一つとして挙げられています。日本で暮らす私たちにとって水不足の問題はあまり実感のわかないものかもしれません。しかし、現状、世界ではきれいな水道水はおろか、水自体が不足して利用できずに苦しめられている人々が多くいるのです。水道水が飲める国は十五ヶ国、しかしそれ以前に二十二億人が管理された安全な飲み水を得ることができていません。私はこの事態を重く受け止めるべきだと思います。この事態を改善していくために、一人一人が問題に真剣に向き合い、危機意識を持って取り組んでいくことが必要なのではないのでしょうか。

水道水が自分のもとに届く。当たり前のように感じられるその裏側には、水に携わる全ての人々の“努力”があるということと、彼らへの感謝の気持ち。また、一方で水不足によって水が手に入らない人々の“涙”

が今もどこかで流れているかもしれないという現実。これらは決してわすれてはならないと思います。そして、水を大切に使いながら、自分もいつの日か水の未来のために貢献できることを考えていきたいと思えます。



佳作・流域賞

「曾祖母が教えてくれた 水の大切さ」

高田中学校 二年 米山 百音

私の曾祖母は香川県坂出市に住んでいる。坂出市は塩の産地でも全国的に有名で曾祖母の家から五分ぐらい歩くと坂出市塩業資料館があるほどだ。曾祖母は大正十三年生まれの九十六歳で、今も元気に暮らしている。今年の正月も会いに行った。相変わらず両手を合わせて「頂きます。」と言ってから、美味しそうにうどんをすする曾祖母をみてほっとしたのを覚えてい

る。曾祖母は戦争の時代を生き抜き、想像できないくらいにたくさんさんの経験をしており、私が学ばせてもらうことは多いのだが、水の作文に取り掛かるにあたり、曾祖母とのエピソードを思い出し、文字にしてみようと思った。

曾祖母は人一倍水を大切にす。理由を聞くと「香川の人やけんね。」という。いつも私が水道の蛇口をた

くさんひねって勢いよく水を流しながら手を洗ったり、蛇口をきちんと閉めていないと「水がもったいないけんね、大切に使うんよ。」と言いながら、遠くにも素早く蛇口を閉めに来る。米のとき汁を畑に撒きに行く、風呂の水を洗濯に使う、食後の油のついた食器は紙で拭いてから洗う・など水を大切にすることが、体に染みついた習慣になっているようだ。

曾祖母が子どもの頃は、度々干ばつに見舞われ、多くの見識者が知識や意見を持ち寄り、ため池や水関連施設の築造・修復を繰り返し、苦勞して水を確保していたそう。曾祖母が女学生だった十五歳の頃戦争が起こり、食べ物が無く水で腹を膨らませたり、さらには飲み水を確保するのも大変な時もあり、水は生死に関わる大切なものだったと聞いた。歴史や地理を学ぶようになり、曾祖母の水を大切にす習慣の意味が分

かってきた。

香川の水の歴史の資料には、『平安の昔、讃岐国司から朝廷に出された文書には「晴天五日を経ば水湿の潤なく、霖雨二日に及べば洪水の難あり・・・」と記され、高松藩記には「・・・川浅く水乏しく、常水の川一つも・・・」と記され、香川においては古来、水の確保は人々の暮らしの中の一大関心事でした。』とあった。香川の歴史は水の歴史と言っても過言ではないのかもしれない。

地理・風土的に見てみると、香川県は四国山地と中国山地に挟まれ、乾いた気流が多く雨雲が侵入しづらく、雨がとても少ない瀬戸内気候の地域にある。気象による災害が少なく、温かい気候と平坦な土地に恵まれている反面、雨が少なく大きな河川がない。そのため、水源が十分でない慢性的な水不足を解消するために、ため池・香川用水を建設し、降った雨を貯めて必用なときにこれを使い、試行錯誤を繰り返しながら、後に稲作水田を開発したのである。水田が出来ること、稲作と同時に裏作として小麦等の畑作がはじまり、水不足と上手に付き合ってきた結果、小麦の収穫が盛ん

になった。うどんの材料である塩・小麦・水すべてが揃い、小麦が醤油の原料にもなるので、自然とうどん作りが始まったようだ。こうしてうどんを食べる習慣が香川全域に広まったのである。

ほぼ一世紀という年月の間、主食としてうどんを食してきた曾祖母が、「長生きの秘訣はうどん！」と言い切るのには、納得せざるを得ない。自然や先代の苦労に感謝することを忘れず、常に水や食べ物を大切に生きる方は素晴らしいと思った。自然と向き合い、自然を感じ、自然を想って生活することの意味を曾祖母から学んだからである。香川の場合、水は自然の恵みというより先代の苦労あつての恵みであり「水と安全はタダ」という言葉に反し、水は人々の努力なしでは得られることのない重要なものなのだと思えて気がつくことが出来た。次に曾祖母の家を訪ね水を口に含む時、ひよっとすると先代の苦労を知った分、かすかに塩の味を感じるかもしれない。



佳作

水の恵みを感じて

高田中学校 二年

館 優衣奈

私の暮らす日本は、世界でも数少ない、家の蛇口から飲み水が出る国です。しかし、それ以上の美味しい水を求めて、ウォーターサーバーを購入する人もいます。やはり、水道水とウォーターサーバーの水を飲み比べると、ウォーターサーバーの水の方が美味しく感じました。皆さんがウォーターサーバーを使う理由は、他にもあるのではありませんが、飲み水に使うという観点から言うと、せっかく蛇口から飲み水が出るのにと、少しもつたいない気がしました。

私は去年のゴールデンウィークに、家族でタイへ旅行に行きました。ホテルの洗面所には「この水は飲めません」のシール。試しに蛇口を捻ってみました、肉眼でギリギリ見えるくらいの大きさの砂が混じっていて、とても驚きました。仕方がないので、現地のスーパーマーケットで二リットルのミネラルウォーター

を買い、歯磨きや湯沸かしに使いました。使うたびに重いペットボトルを持ち上げなくてはならず、それはもう本当に不便なものでした。現地の方々は、これを毎日行っているのだと思うと、頭が下がる思いになりました。そして、自分が普段いかに快適な生活を送っているのかを知ることが出来ました。

日本のゴールデンウィークの季節は、タイという雨季の時期でした。きっとたくさん雨が降るのだろうと思っていたのですが、雨は一向に降りません。しかし、滞在三日目のお昼に、初めての雨が降りました。道路が浸水して車は故障し、ホテルも停電してしまうほどの豪雨でした。あとから、日本人のガイドさんに聞いたところ、この豪雨は人工降雨だったということが分かりました。干ばつが原因で水不足になっていたための措置だったのだそうです。私はこの時、初めて人が

作り出した雨に降られました。人工降雨とは、雨が降りそうな雲にヨウ化銀などの物質を乗せた飛行機を低空に飛ばして、雨を降らせるものです。一見、水不足や、場合によっては大気汚染などの問題を改善する、画期的なものに感じますが、それによる副作用も生じます。一つ目は、空気中にばら撒かれたヨウ化銀が環境に影響を与えてしまう可能性があること。そしてもう一つは、今回のように、ある地域だけが豪雨になりたりすることにより、気候の変化に敏感な動植物の生態系が変化してしまうことです。また、この干ばつは、チリ沖の海水温が上昇することによって引き起こる、エルニーニョ現象が原因だったということを知りました。この現象は、地球温暖化の影響が著しくうかがえるものだと思います。

地球温暖化の問題は、世界的に問題視されていますが、先進国の中には消極的な態度を示している国もあります。どの国の家の蛇口からも安全で綺麗な水が出るようになるには、まずは十分な水資源の確保が課題だと考えます。その課題を解決すべく人工降雨には、メリットばかりでなく、大きなデメリットも生じてし

まいます。いかに生物や環境に影響を与えないように解決する方法は、たった一つです。人間が地球温暖化に対して、現状にきちんと向き合い、強い危機意識を持つて解決していこうという姿勢を持つ事です。温室効果ガスの排出量がこのまま増え続ければ、地球の自然環境（水資源）は大きく損なわれることになりかねません。だからこそ、影響力も経済力も大きい先進国が中心となり、解決策を練っていく必要があるのです。日本は水資源に恵まれた国といわれていますが、世界の水不足の問題とも強いつながりをもっています。では今、私が地球の自然環境のために出来ることは何なのか、よく考えて日々過ごしていこうと思いました。



佳作

「水が教えてくれたこと」

高田 中学校 二年 長井 咲椰子

私は時々、水道水を飲むことがある。よく「外国では水道水は飲めない」と聞くが、正直あまり実感がわかなかった。また、最近、外国の人達はお風呂に入る習慣がなく、ほとんどシャワーのみだと知り驚いた。

調べてみると、お風呂に入る習慣もあってか、日本人一人あたりの水使用量は世界平均の二倍ほどで、それだけ水が豊かなんだと分かった。

そんな日本の生活用水は、浄水場でたくさん工程を経てきれいにされる。私は一度近くの浄水場に行ったことがあり、水がきれいになるまでの工程を聞いたが、その中で最も印象に残っているのがろ過の工程についてである。

私はそのとき浄水場でお話を聞くまで、当たり前のように使っている水についてあまり深く考えたことが無く、浄水場では葉や機械を使って人工的に水をき

れいにして思っていた。しかし、葉を使うのは砂を沈めやすくすると殺菌をするときだけで、あとは砂を沈めることばかりだと知り、そんなに時間がかかるのかと驚いた。

ろ過の工程の説明では砂と砂利を使って水のをとれを取ると聞き、一度水の中の砂を取り除いたのに砂で本当にきれいになるのかと思った。

私は年に一度家族で桜を見に山登りに行くが、湧き水がわいているのを見て、どうして山からこんなにきれいな水が出るのか不思議に思った。そこで調べると、地面にしみこんだ水が何層もの地層でろ過されたものだと知り、浄水場でのろ過も同じ原理なんだと分かった。

浄水場では人工的に水をきれいにするのではなく、自然の原理を利用しているのだと分かり、自然の力は

偉大だと改めて感じた。

また、水道水が安全かどうかを調べるため定期的に検査を行っている」と聞き、普段の生活の中で水道水を飲むことができるのは日本の水道水の制度や、浄水場の人たちや自然の力のおかげだと知った。

それからは、水道水を飲むことが当たり前だとは思わなくなり、水をきれいにしてくれている人達に感謝の思いでいっぱいになった。そしてなるべく無駄使いしないように気をつけようと思う。

物事に感謝の気持ちが生まれることで、それを大切にしようと思うことができる。また、自分が当たり前だと思つて見過ごしていたところにも、感謝すべきものはたくさんあるということに水は気づかせてくれた。



佳作

宮川用水から学ぶ

皇學館 中学校 三年 白石 伊甫貴

新型コロナウイルス感染予防のため、三月からしばらく休校が続ききました。休校期間が米の農繁期と重なり、運動不足の僕は田植え作業に借りだされました。作業は慣れない事ばかりで大変でした。連日筋肉痛が続きましたが、学ぶ事も多く、良い経験となりました。

田植え作業の手伝いをしていてふと気になった事があります。「この田んぼに使用されている大量の水は一体どこからくるのだろう」という事です。今まで全く気にした事はなかったけれど、田植え作業に参加して初めて田んぼに必要な水の量を目の当たりにしました。祖母に「この水はどこから引いているの？」と尋ねました。水は宮川用水から引いていて年間約二十万円で支払っていると教えてくれました。僕にとって一番身近な地元の川「一級河川宮川」の水だとわかりました。

僕の住んでいる城田地区は多くの田んぼがありません。特に上地町はどこまで続くのかと思うくらい田んぼが広がっています。その全ての田んぼに水を張るとなったら本当に莫大な水の量が必要となります。数値で表すとしたら僕には全く予想が付きません。宮川用水について自分で調べる事にしました。

宮川を中心とした伊勢平野は優良農業地帯でありながら、水源である宮川より高い位置に農地が存在していたことから宮川の水を農業用水として利用することは困難だったそうです。それが宮川用水農業水利事業（昭和三十二年～四十一年）として用水整備がなされ、宮川ダムに七五〇mの農業用水が確保され、農業用水を栗生頭首工から取水し五七六haの農地への配水が可能になったそうです。栗生頭首工とは多気郡大台町栗生にある取水のための可動堰です。農繁期

には最大一秒間に〇・九トンの水を取水するそうです。これにより宮川下流域の水不足が解消され、米作りが盛んとなり県下有数の先進農業地域へと発展したそうです。僕は伊勢市のみの配水と思っていましたが大台町、多気町、明和町という広い範囲で宮川の水が配水されていると初めて知り驚きました。現在どの田んぼでもバルブをひねればきれいな宮川の水が大量に出てきます。それはなぜなら先人達が百年以上前から何度も計画を立てては断念を繰り返し、それでも諦めず何十年も願いを引き継ぎ、とてつもない苦労を重ねた結果だと分かりました。事業が完成し宮川用水での通水テストで水が流れる様子を見て関係者の人達全員が喜びの笑顔でバンザイをしている当時の新聞記事が印象的でした。米作りにおいて水とは命のような存在だと祖父母は言っていました。その命の水として宮川の水が利用出来るなんて宮川用水完成に携わった全ての方々に感謝しないといけないと思いました。

宮川用水広報に節水を促す記載がありました。宮川から取水出来る量は永遠にあるわけではありません。宮川用水は一年間に取水出来る量が決まっています。

僕は宮川の水はなくならないからいつでも無限に田んぼに水が出ると思っていました。無駄な水をなくす節水の必要性がある事を知りました。

今年田植えを経験する事により、今まで気にも留めなかった田んぼと水の関係を知るとともに、宮川の水が田んぼにくるまでの長い歴史や地域の事も学ぶ事が出来ました。当たり前だと思っていた事に感謝します。宮川は日本で有数の清流として有名です。その宮川の水で育ったお米の新米を毎年僕は食べられるなんて本当に贅沢です。来年も田植えを手伝います。



第42回「全日本中学生水の作文コンクール」について

「水の週間」（8月1日～7日）行事の一環として実施された、第42回「全日本中学生水の作文コンクール」の概要は次のとおりです。

1 応募要領

- (1) 課題 「水について考える」（題名は自由）
- (2) 原稿枚数 400字詰原稿用紙4枚以内
- (3) 募集期間 令和2年1月15日～令和2年6月30日
- (4) 版权等
 - ・応募作品は自作未発表のものに限る。
 - ・応募作品の返却は行わない。
 - ・入選作品の著作権は主催者に帰属する。

2 地方審査

第42回「全日本中学生水の作文コンクール」審査基準に基づく審査により、優秀作文5編を決定しました。

審査員（4名）

- 三重県中学校国語教育研究会会員
- 三重県環境生活部大気・水環境課職員
- 三重県企業庁企業総務課職員
- 三重県地域連携部水資源・地域プロジェクト課職員

3 三重県の応募状況

応募学校数	応募総数	学年別		
		1年生	2年生	3年生
5校	399名	148編	212編	39編

4 中央審査

各都道府県から推薦された優秀作文は、国土交通省におかれる中央審査会で審査され、最優秀賞1編、優秀賞8編、入選33編、佳作（最優秀賞、優秀賞、入選を除く作文）が決定されました。

5 主催・共催

- 主催 水循環政策本部、国土交通省、三重県
- 共催 琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール実行委員会

6 その他

優秀作文5編については、「琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール実行委員会」（構成団体：三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県）でも審査され、流域賞1編が決定されました。

